

スポーツ・ボランティアに関する研究動向
-スポーツ経営学からの批判的考察-

山下博武¹⁾ 行實鉄平²⁾

Trend of Sports Volunteer:
Critical Consideration from Management for Sports

Hiromu YAMASHITA Teppei YUKIZANE

Abstract

So far it has been with the original self-evident that the Sports Volunteer be essential to materializing Sports in most studies. It is by no means essential to be understood that the cheap labor. The Sports Volunteer is one of involvement of Sports. In view of Teleology of Sport Administration, it is necessary that examining to question which the Sports Volunteer can increase the Sport life.

Therefore we did rearrange and analyze to 61 preceding studies, to find out that why is it necessary. As a result, preceding studies was classified into six category what “anecdotal report”, “theory and reality”, “behavior of participation”, “behavior of continuation”, “alteration of consciousness”, “other”. And we presented to two future researches by Critically considering as follows:

1) The Sports Volunteer Include the Sports to Volunteer as well as the Volunteer from Sports. But the research is nothing. We have to focus on the Volunteer from Sports because to find out identity in the Sports Volunteer, compared with general volunteer.

2) In the present study, we have demonstrated that there is no difference the Sports Volunteer and the General Volunteer at participation motive. By contrast, the Qualitative Research in preceding studies elucidated particular the process of consciousness Altering for the Sports Volunteer. It is necessary elucidate mean of experience as the Sports Volunteer.

Keywords : Sports, Volunteer, Review of the Literature

¹⁾ 筑波大学大学院

Tsukuba University

²⁾ 徳島大学大学院 ソシオ・アート・アンド・サイエンス研究部

Institute of Socio-Art & Science, Tokushima University

I. はじめに

1980年代以降、市民マラソンやJリーグの登場により、全国各地でスポーツイベントが開催され、一般市民がボランティアとして大会運営に参加するようになった。1995年には、阪神淡路大震災によってボランティア概念が国民に広く浸透し、1998年の長野冬期オリンピックでは35,000人ものボランティアが活躍し注目を集めた。このように、スポーツ・ボランティアが浸透していくことで、それまでボランティアとして捉えられることのなかったスポーツ指導者などもスポーツ・ボランティアとして徐々に認識されるようになってきた。

また、2010年に策定された文部科学省の「スポーツ立国戦略」では、新たなスポーツ文化の確立を目指し、スポーツを「する人」や「みる人」だけでなく、「支える（育てる）人」、いうなれば、スポーツ・ボランティアの存在が重要であることが示されている。

しかしながら、文部科学省（2014）の調査によると、成人の過去1年間のスポーツ・ボランティア実施率は、1994年の6.1%から、2010年に8.4%と最高値を記録しているものの、2012年と2014年には7.7%となっており、6%～8%でほぼ横ばいの傾向で推移していることが示されている。また、海外（特にヨーロッパ諸国）との比較においては、スウェーデン25%、デンマーク18%、オランダ18%となっており、日本のスポーツ・ボランティア実施率は、未だ低調であるといっても過言ではない。よって、上述のような社会的事象からスポーツ・ボランティアが我が国に定着していると判断するのは危険である。このことは、地方公共団体の募集するスポーツ・ボランティアに、応募が皆無であったという報道（毎日新聞、2014）などからも読み取れよう。

他方、スポーツ社会科学領域では、このような現実的なスポーツ・ボランティアの広がりに伴って、それらを対象とした研究が積極的に行われている。具体的には、初期に学術領域で「スポーツ・ボランティア」概念を提起した武隈（1997）が、それらの行動原理の解明こそが第一の課題と指摘して以降、「参加動機」や「継続要因」を中心に研究が進められてきた。だが、これまで多くの研究が、スポーツ・ボランティアはスポーツ現象の成立のために「必要不可欠な存在」として、いわば前提として位置づけられており、何故それらがスポーツ文化の発展に無くてはならないものであるかを問い直すことは不問とされてきた。

確かに、スポーツ・ボランティアは、スポーツ事業成立のために欠くことのできない貴重な人的資源の一つである（松岡・小笠原、2002）。磯谷（2008）は、イベント開催に伴うアルバイト人件費をボランティアに置換したときのコスト削減効果やリスクヘッジ効果を論拠にしながら研究を行っているが、果たして、スポーツ・ボランティアは、このようにスポーツ組織の利益のために「必要不可欠」なのであるだろうか。それとも、スポーツ・ボランティアの活躍を促し、スポーツ事業をより魅力的なものとするために「必要不可欠」なのであるだろうか。残念ながら、この研究においては、その議論がなされていない。

今日、多くのスポーツ組織が人的資源の確保に苦慮している現状（松尾ら、1994；志賀・荒井、2013）を鑑みれば、スポーツ・ボランティアが「安い労働力」として捉えられる危険性を多分に孕んでいることを認識しなければならない（山口、1998）。また、スポーツ・ボランティアのマネジメント問題をスポーツ組織の安定経営などの問題意識に依るのであれば、収益確保に繋がる経営戦略論やマーケティング論といった

一般の社会科学領域の研究がおおいにその役割を果たすといえよう。だが、敢えてスポーツにおけるボランティアを「スポーツ・ボランティア」と捉え、スポーツ社会科学領域で議論していく意義は、スポーツ・ボランティアが何故、スポーツ文化の発展に不可欠たるかを明らかにすることに他ならない。それにも関わらず、かかる問題意識を真っ向から検討した研究はこれまで皆無に等しい。

翻って、スポーツ・ボランティアは、規模や対象者、営利非営利問わず、あらゆるスポーツ経営の現場でみられる。先述の問題意識は、スポーツ経営事象を対象とするスポーツ経営学の範疇で当然に議論し得るものである。

清水（1997）は、拡大したスポーツ経営領域の個別的諸研究を統合するために同領域の基本価値として「スポーツ生活の向上や豊かさ」或は「文化としてのスポーツの創造的発展」を示した。つまり、スポーツ経営学は、個別の経営体の要請に答えるのではなく、一人の生活者の論理に立った「スポーツ生活の豊かさ」を考究することを基本的な課題とするのである。そして、スポーツ・ボランティアは、「支えるスポーツ」という「するスポーツ」や「みるスポーツ」と並ぶスポーツの関わり方の一つであることを勘案すれば、スポーツ経営学の領域においては、スポーツ・ボランティア参加者をスポーツ生活者の一人として捉え、その個人の視点からスポーツ経営事象を検討していくことが求められるのではないだろうか。このことから、スポーツ経営学においては、個々の経営体がスポーツ・ボランティアをいかに確保するかなどといった課題を議論するのではなく、「スポーツ・ボランティアがなぜ個人のスポーツ生活を豊かにするのか」、或は「どうすればスポーツ・ボランティアが文化としてのスポーツの創

造的発展に寄与できるのか」といった問いに答えるための研究課題を検討することが焦眉の課題であると言えよう。

以上のことから、本研究では、これまでのスポーツ・ボランティアに関する研究蓄積を整理し、スポーツ・ボランティアが何故スポーツ文化の成立に必要不可欠であるかを、スポーツ経営学の基本価値に照らして批判的に検討することで、同領域における今後の研究課題を提示することを目的とする。

Ⅱ. 方法

1. 対象とした先行研究

対象とする先行研究は、「スポーツ・ボランティア」について論じる論文であり、NII 学術情報ナビゲータ (CiNii) により検索を行なった^{注1)}。その後、検出された論文において参考・引用されている論文・文献を補完した結果、参考文献にあげた論文 60 件、文献 1 件を対象とすることにした。対象となった論文は、「学術誌 (査読付き)」が 9 件、「学術誌 (査読無し)」が 16 件、「大学研究紀要」が 34 件、「修士論文」が 1 件であり、期間は 1991 年から 2015 年のものであった。

なお、本論文の構成は、まず、スポーツ・ボランティアの概念を整理し、その分析枠組みを提示した。次に、先行研究を「研究課題」で分類し、それを「研究カテゴリー」に集約した上で、それぞれの内容の関係性を整理した。最後に、それまでに得られた結果を踏まえ、スポーツ経営学の立場からスポーツ・ボランティアを巡る研究動向と今後の課題について考察を行うこととした。

2. スポーツ・ボランティア概念の整理

そもそも、スポーツ・ボランティアとはなにか、その概念を整理したい。スポーツ・

ボランティアが初めて募集されたのは、1985年のユニバーシアード神戸大会である。その後、既述のようにスポーツ・ボランティア概念が社会に認知され、スポーツ社会科学領域でも学際的に取り上げられるようになる。

まず、武隈（1997）は、一般のボランティア概念にならって、スポーツ・ボランティアを「個人の自律的な決定と選択に基づく、公益性、非営利性を前提としたスポーツに関わる社会的活動、およびその行為主体」と定義している。

次に、山口（1998）は、ボランティアの「自主性」、「社会性」、「無償性」といった特性に基づき、スポーツ・ボランティアを「個人の自由意志に基づき、その知識・技能や時間などを進んで提供し、社会に貢献すること」と定義している。

そして、2000年には、スポーツ・ボランティアの実態を調査する研究協力者会議が組織され、それを「地域におけるスポーツクラブやスポーツ団体において、報酬を目的としないで、クラブ・団体の運営や指導活動を日常的に支えたり、また国際競技大会や地域スポーツ大会などにおいて、専門的能力や時間などを進んで提供し、大会の運営を支えたりする人」（スポーツにおけるボランティアの実態等に関する調査研究協力者会議、2000）と定義している。この定義は、生涯学習審議会（1992）による「個人の自由意志に基づき、その技能や時間などを進んで提供し、社会に貢献すること」という一般ボランティアの定義と、「自発性」、「無償性」、「公共性」、「先駆性」といった4つの一般ボランティアの基本的理念を根拠としている。この調査によって、スポーツ・ボランティアが包括的に理解され、以降の研究では、この定義、もしくは、この研究協力者会議を中心的に進めた山口（1998）の定義が多く用いられている。

さらに、日本スポーツボランティア・アソシエーションは、スポーツ・ボランティアを「スポーツという文化の発展のために、金銭的報酬を期待することなく、自ら進んでスポーツ活動を支援する人のこと」と定義している（日本スポーツボランティア学会、2008）。他にも、笹川スポーツ財団（2011）は、「報酬を目的としないで自分の労力、技術、時間を提供して地域社会や個人・団体のスポーツ推進のためにおこなう活動のこと」と定義している。

いずれの定義も、個人の自主的ないし自発的な報酬を目的としない社会的な活動であるボランティア概念に基づき定義がなされており、スポーツ・ボランティアは、スポーツ現場でのボランティアとして、ひとまずは、理解できよう。では、なぜ敢えてスポーツにおけるボランティアを「スポーツ・ボランティア」と定義し、一般ボランティアと分けて研究していく必要があるのだろうか。

3. 分析の枠組み

（1）研究カテゴリーの生成

本研究では、スポーツ・ボランティアを巡る研究動向を把握するために、先行研究を主要な「研究課題」によって分類し、最終的に「研究カテゴリー」として集約した（表1）。その結果、「事例報告（13件）」、「理論・実態（17件）」、「参加行動（9件）」、「継続行動（9件）」、「意識変容（7件）」、「その他（5件）」の6つの「研究カテゴリー」に分類された。

その方法としては、まず、複数の研究者で、全ての先行研究における題目、キーワード、本文の内容を確認し、研究シートを作成した。次に、研究者間のトライアングレーションにより、各先行研究から主要な「研究課題」を抽出し、KJ法を用いて「研究カテゴリー」を生成した。このKJ法とは、

表 1：スポーツ・ボランティア研究の動向

研究カテゴリー	研究課題	n	(%)
事例報告	連盟活動報告, 海外事例報告, 実践報告, 事業実践報告, 講座運営報告, 活動実践報告, 活動報告, 支援実践報告, プログラム実践報告, 事例紹介, NPO運用報告	13	(21.7)
理論・実態	行動原理, 定義・分類, 実態把握, 指導者実態, 国際ボランティア実態, 外部指導者実態, 指導者理論構築, 指導者専門性, 活用実態, 成立要件試論, 総合型地域スポーツクラブ試論, 障害者スポーツ指導者実態, 活動実施状況, 組織運営実態, 研究動向, 住民意識実態	17	(28.3)
参加行動	イメージ, 参加動機類型, 参加動機, ボランティア観, 活動期待, ニーズ, 依頼型ボランティアの参加動機, 参加動機比較	9	(15.0)
継続行動	継続意欲, ドロップアウト, 継続要因, 組織コミットメント, 動機づけ要因, 継続参加プロセス, 活動促進阻害要因	9	(15.0)
意識変容	住民意識変容, 役割構造と意識変容, 障害者へのイメージ・意識・態度変容, 健康感, 障害者意識変容プロセス, 意識変容プロセス, 心理的プロセス	7	(11.7)
その他	保護者意識, コーチへの評価, まちづくり, 組織化	5	(8.3)

一見まとめようのない複数多様なデータを、個人の思考だけでなく、複数人によって類似性や共通性のあるものごとにカテゴリー化し、これを繰り返すことで新たな意味や構造を理解する方法である(川喜田, 1967)。

この「研究カテゴリー」の生成であるが、例えば、田引(2008)は、障害者スポーツ・ボランティアを継続的に行っている参加者の参加動機の特徴を明らかにし、ボランティアマネジメントの検討材料を得ることを目的に、量的調査を実施している。その結果、因子分析によって7つの参加動機因子を抽出し、それらの特徴を考察している。この研究の主たる研究課題は、障害者スポーツ継続参加者の参加動機の特徴を明らかにすることである。そこで、この研究の「研究課題」を「参加動機」と位置づけ、他の「イメージ」、「参加動機類型」、「ボランティア観」、「活動期待」、「ニーズ」、「依頼型ボランティアの参加動機」、「参加動機比較」といった「研究課題」と合わせて「参加行動」という「研究カテゴリー」にまとめることとした。このように、他の先行研究における「研究課題」と「研究カテゴリー」においても同様の手順で分類と集約を行った。なお、「保護者意識」、「コーチへの評価」、「まちづくり」、「組織化」といった「研究課題」は、本研究の分

析枠組みでは集約化できないものであったため「その他」という「研究カテゴリー」に位置づけている。

(2) スポーツ・ボランティア関係性図の措置

スポーツ・ボランティアに関する研究は、1990年代から、スポーツイベントのマネジメント課題の一つとして認識され研究が行われるようになる。大規模スポーツイベントには、大量のスポーツ・ボランティアが必要不可欠であるとされ、いかに人を集めるかといった観点から「参加動機」や「イメージ」などの「参加行動」に関する議論が積極的に行われた。同時に、障害者スポーツや地域スポーツなどの日常的なスポーツ活動のマネジメント課題として、いかに継続して参加してもらうかといった観点から「継続要因」や「阻害要因」などの「継続行動」に焦点が当てられるようになる。また、そのようなスポーツ・ボランティアの行動原理に関する研究を中心に進めながら、その実態や課題を把握するような「理論・実態」に関する研究も行われてきた。そして、2000年代からは、スポーツ・ボランティアを体験することで参加者にどのような変容をもたらすのかといった「意識変容」に関する研究が行われるようになる。

「その他」、周辺の研究として「まちづくり」や「保護者意識」などに関する研究が見られるようになる。また、随時、海外の事例紹介や自らのボランティア活動の実践報告をする「事例報告」が行われている。

しかし、この「事例報告」からは理論的な示唆が得られないため、それを除く5つの「研究カテゴリー」を一般的な参加行動の流れと照らして、図1のようなスポーツ・ボランティア研究の関係性図を指定(作成)した。

以下、この関係性図について、5つの「研究カテゴリー」の順に詳述していきたい。なお、図1および下記では、研究課題を「」に、研究カテゴリーを【】で示すこととする。

第一に、スポーツ・ボランティアは、参加者という主体が、スポーツ・ボランティア活動に参加し、継続参加者に至る(ときには離脱しながら)という一連のプロセスであると捉えることができる。スポーツ・ボランティアは、スポーツの多様化とともにその活動も多岐に渡る。そのような活動の「定義・分類」を行い「活動実施状況」を把握する研究など、「行動原理」や「指

導者専門性」などの理論を構築し、その課題を議論する研究は【理論・実態】に関する研究と位置づけている。

第二に、現実の参加者は、スポーツ・ボランティアに関する「イメージ」や「ボランティア観」を有しており、それらを背景に様々な「参加動機」を持ちながら活動に関わっていく。このように、参加者がスポーツ・ボランティアに参加するまでの過程を「研究課題」とするのが【参加行動】に関する研究である。

第三に、参加者は、実際の活動の中で様々な体験をする。その「意識変容プロセス」や「役割構造と意識変容」の関係性を捉える研究などは、【意識変容】に関する研究である。

第四に、参加者は、スポーツ・ボランティア活動に参加することで、「継続要因」などによって「継続意欲」や「組織コミットメント」などを形成し、時には「ドロップアウト」に至る。そうすることで、活動を継続し、継続参加者としてスポーツとの関わりを形成することになる。このようなスポーツ・ボランティアに継続参加していく要因を理解する研究は、【継続行動】に

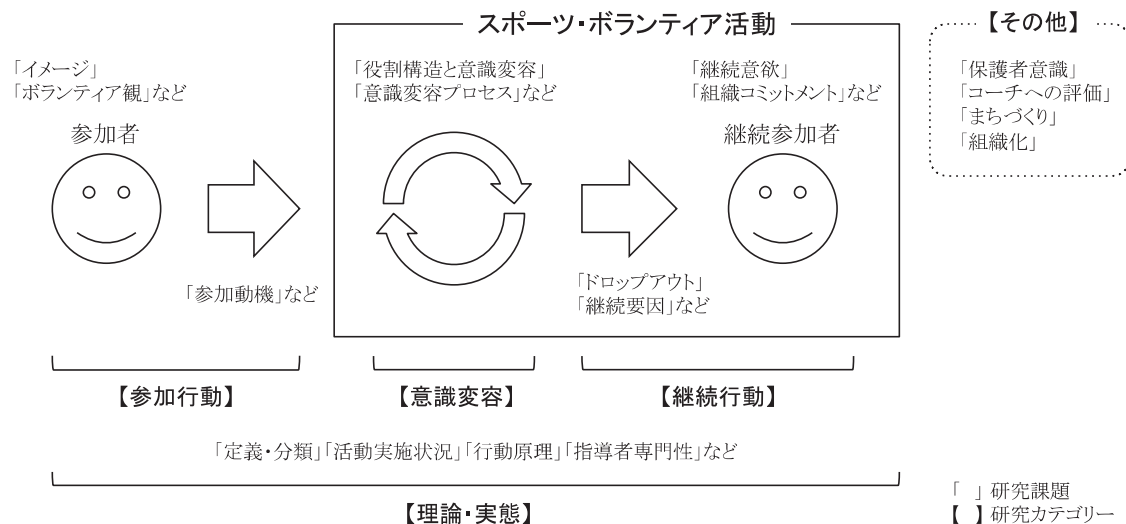


図1: スポーツ・ボランティア研究の関係性図

関する研究である。

第五に、図 1 の関係性図によって体系化し得ない各種の研究は、【その他】に位置づけている。

本研究では、この関係性図を分析の枠組みとし、5 つの【研究カテゴリー】の内容を具体的に確認しながら、スポーツ・ボランティア研究の動向を把握するとともに、今後の研究課題を検討していくこととする。

Ⅲ. 結果

1. 「理論・実態」に関する先行研究

スポーツ・ボランティアは、スポーツ現象の多様化に伴い、その活動の種類も多岐にわたる。そのため、スポーツ・ボランティアを理解する上では、それらの活動の範囲を定め、どのような活動が行われているのかを体系的に把握するような研究が行われている。

先行研究では、ボランティア指導者の年齢や活動様態などの実態を把握する研究（高橋，2001），青年海外協力隊スポーツ部門の派遣実績やスポーツ種目などの実態を把握する研究（小栗，2001），地域スポーツ団体の組織構造や役員活動などの実態を把握する研究（谷藤，2005），障害者スポーツ指導員の活動内容などの実態を把握する研究（保井ら，2004）のように様々な

フィールドで、その活動実態を把握する研究がなされている。また、スポーツ指導者のあり方については、その専門性とボランティア課題の議論が盛んになされている（塩谷，2002；海老原，2002；海老原，2003；松尾，2002）。

一方で、武隈（1997）は、スポーツ・ボランティアを、活動の「方向性」に注目して「スポーツへのボランティア」と「スポーツからのボランティア」の 2 つに分類している。つまり、スポーツ・ボランティアには、スポーツイベントやスポーツ指導といったスポーツの場で展開される活動と、スポーツ団体やスポーツ選手が福祉施設を訪問するなどといったスポーツ以外の場で展開される活動の 2 種類の方向性があると示唆している。

次に、山口（1998）は、「スポーツへのボランティア」を、日常的な場で行われる「するスポーツ」、非日常的な場で行われる「みるスポーツ」の 2 つに分類している。その後、スポーツにおけるボランティア活動の実態等に関する調査研究協力者会議（2000）は、これまでの分類に具体的な活動内容を盛り込み、スポーツ・ボランティアの分類を示している。この分類に従って、先行研究を再整理すると「クラブ・団体（日常的な場）」に関する研究が 38 件（63.3%），「イベント（非日常的な場）」に関する研

表 2：スポーツ・ボランティアの種類と先行研究

分類	主体	役割内容	n	(%)
クラブ・団体ボランティア 日常的：活動の場 ＝クラブ・スポーツ団体	ボランティア指導者	監督・コーチ，アシスタント指導者	38	(63.3)
	運営ボランティア	クラブ役員・幹事，世話係，運搬・運転，広報・データ処理，競技団体役員等		
イベント・ボランティア 非日常的：活動の場 ＝地域スポーツ大会， 国際・全国スポーツ大会	専門ボランティア	審判員，通訳，医療救護，大会役員，情報処理等	14	(23.3)
	一般ボランティア	給水・給食，案内・受付，記録・掲示，交通整理，運搬・運転，ホストファミリー等		
アスリート・ボランティア	プロスポーツ選手 トップアスリート	福祉施設・スポーツクラブ訪問，イベント参加等	0	(0.0)

クラブ・団体ボランティアとイベント・ボランティアの複合的な研究 1 件（2%），いずれにも当てはまらない研究 7 件（12%）

※山口（2004）を一部修正

究が 14 件 (23.3%) , 「アスリート」に関する研究が 0 件 (0%) , 理論研究などこの分類に当てはまらない研究が 7 件 (11.7%) , 「クラブ・団体 (日常的な場)」と「イベント (非日常的な場)」の複合的な研究が 1 件 (1.7%) となった (表 2) .

このことから, 同領域では, 「スポーツへのボランティア」, 特に日常的な場における研究が多いことが分かる. 一方で, 「スポーツからのボランティア」については, 全く焦点が当てられていない傾向がうかがえた.

2. 「参加行動」に関する先行研究

スポーツ・ボランティアがスポーツ社会科学領域に認識されてから現在に至るまで, その「参加動機」に関する研究 (松本, 1999 ; 松岡・小笠原, 2002 ; 谷ら, 2003 ; 田引, 2008 ; 内藤 ; 2009 ; 松永, 2012 ; 松野ら, 2012) が中心に進められ, これに関連して「イメージ」に関する研究 (新出ら, 1998 ; 森谷, 2002) , 「ニーズ」に関する研究 (内藤, 2007) も行われている. 特に, 参加動機に関する研究は, 障害者スポーツや地域スポーツのように様々なフィールドで研究が行われている. そして, それらの研究蓄積から明らかになったスポーツ・ボランティアの参加動機を, 一般のボランティアにおける参加動機 (桜井, 2007) と照らして

整理したものが表 3 である. その結果, スポーツ・ボランティアの参加動機は, 「利他心」, 「自己成長」, 「社会適応」, 「技術取得・発揮」, 「レクリエーション」, 「利得・損失計算」, 「規範的参加」, 「理念の実現」, 「テーマや対象への共感」といった一般のボランティアと同様の因子が抽出されていることが分かる. 「テーマや対象への共感」として「スポーツ」の要素が多くなっているものの, スポーツ・ボランティアに固有の参加動機は明らかにされているとはいいがたい. これは, 別言すれば, スポーツ・ボランティアに固有の参加動機は, 存在しないということを意味している.

3. 「継続行動」に関する先行研究

スポーツ・ボランティアに関する研究は, 【参加行動】に並んで【継続行動】の研究蓄積が多く存在する. まず, 「継続要因」に関する研究として, 長ヶ原ら (1991) は, スポーツイベントのボランティア参加者を対象に質問紙調査を実施し, 日常的にスポーツを行っている者の方がそのイベントへの継続意欲が高いことなどを明らかにしている. 福山 (2002) は, キャンプボランティア参加者を対象に質問紙調査を行い, 活動の満足度が後のボランティア参加に影響を与えることを示した. 磯谷 (2008) は, プロスポーツの試合ボランティア参加者を

表 3 : スポーツ・ボランティアにみられる参加動機因子

桜井 (2007)	利他心	自己成長	社会適応	技術習得・ 発揮	レクレ- ーション	利得・損失 計算	規範的参加	理念の実現	テーマや対 象への共感
松本 (1999)	ボランティア	自己成長	他律参加	技術習得・ 発揮	レクレ- ーション	報酬	社会参加	参加者 交流支援	
松岡・小笠原 (2002)	社会的義務	自己陶冶	組織的義務	キャリア	社交	学習・経験		個人的 興味	スポーツ
谷ら (2003)		生活変革		スポーツ 技能提供	仲間づくり	社会的有利	社会貢献		
田引 (2008)	参加者支援	自己成長	依頼			報酬	社会貢献	個人的 興味	スポーツ
内藤 (2009)		自己実現	依頼		レジャー		地域貢献		スポーツ
松永 (2012)		能力向上			社交	特典	地域貢献		スポーツ

対象に質問紙調査を実施し、「選手・スタッフ交流動機」、「利他・地域貢献動機」、「スタッフ交流満足」、「自己効力感満足」、「ボランティア集団性満足」、「組織コミットメント」の6変数と活動継続意欲に有意な相関があることを明らかにしている。これに関連して、「組織コミットメント」に関する研究も行われている（北村ら，2005；行實，2009）。

以上の研究は、質問紙調査といった定量的な研究に限定されていたが、定性的な研究も行われるようになっていく。

志賀・荒井（2013）は、スペシャルオリンピックに参加したボランティアに対してインタビュー調査を実施し、ボランティアの「恩恵・促進要因」と「負担・阻害要因」を明らかにしている。具体的には、「恩恵・促進要因」として「自分が成長できる」、「アスリートの成長をみることができる」、「楽しいと感じる」、「新しい出会いの機会になる」、「自分で自由に動ける」、「偏見をなくすことにつながる」、「上の立場の人が出過ぎないようにしている」、「勝利至上主義ではない」、「身体の状態が望ましい」、「自分のペースで活動できる」、「関わっている人たちがいい」といった要素を示している。一方、「負担・阻害要因」として、「知識・技術が不足している」、「自分の都合を合わせるのが難しい」、「アスリートとの関わりが難しい」、「コーチの仕事に対する責任が大きい」、「コーチの仕事に対する負担が大きい」、「ファミリーの対応が難しい」、「スペシャルオリンピックのプログラムに問題がある」、「ボランティアの人数が足りていない」、「自分の子どもが参加している」、「経済的な負担がある」、「年齢が高い」、「自分には適正がないと思っている」といった要素を示している。

さらに、大山ら（2012）は、継続的に知

的障害者スポーツのボランティア活動に従事している大学生を対象にインタビュー調査を実施し、大学生が多様な参加動機を持ちながら活動へ参加し、活動の中でジレンマの蓄積を経験し、それを通して指導者としての使命感を形成するといったボランティアへの継続参加プロセスを明らかにしている。そして、ボランティア活動に何らかの楽しみを見出すことができれば継続的な参加が期待できること、活動を継続するほど楽しいことだけでなく、負担感が生じるような経験をすることで指導者としての使命感を形成させ、それが継続意欲をより強化する要因になることを示唆している。

以上のような一連の研究、特に定量的な調査では、スポーツ・ボランティアの活動継続として、個人属性や満足度、集団や組織への帰属意識などが影響しており、運動習慣や選手との交流期待が示されている点は、スポーツ活動に特徴的な要素であると言える。

また、定性的な調査では、アスリートに関する継続・阻害要因が抽出されている他、一定のジレンマが使命感を形成し継続意欲を強化するなどといった定量的な分析では捉えられなかった要因が多く報告されている。

このように、【継続行動】に関する研究は、定量的にその要因を分析する視点から、その影響関係の複雑性を鑑みて定性的な分析視角に焦点が当てられるようになってきていることが研究動向の特徴として指摘できる。

4. 「意識変容」に関する先行研究

既述のように、スポーツ・ボランティアに関する研究は、スポーツイベントの主催者や日常的にスポーツ活動を営む団体などの要請に伴って、【参加行動】と【継続行動】に関する研究が多く行われてきた。し

かし、2000年代以降は、そのような研究とともに、スポーツ・ボランティア活動が参加者の内面にどのような変化をもたらすのかという研究が行われるようになる。

豊田・金森（2007）は、スポーツイベントボランティアに参加した大学生を対象にインタビュー調査を実施し、大学生がボランティア活動を通じて「消極的態度→自己変容→ボランティアに対する態度の変化」といった心理的プロセスを辿ることを明らかにしている。また、スポーツを「する」視点から、「支える」視点への移動が内的に経験されていたことを示唆している。

岡田（2013）は、障害者スポーツ・ボランティアに参加した大学生にインタビュー調査を実施し、大学生が障害者とのスポーツ活動を通じて、健常者である私と精神障害者という2分した立場の捉え方から始まり、違和感や境界線のゆらぎを経験しながら、障害の有無に影響されないチームの一員として、お互いを認め合う協同的な関わりとなることで、私も精神障害者も地域社会の一人であるといった同等性・当事者性を理解するといった意識変容プロセスを明らかにしている。また、従来、交流体験によって自らの精神障害者に抱くイメージが払拭されて、肯定的でポジティブな正しい知識や認識が芽生えたと考えられていたが、むしろ、交流体験によって精神障害者について整理がつかない状況に陥り、その不安定さの中で知識の必要性を実感しながら、体験と想像によるイメージを積み重ね再構築させていくことを示唆している。

山下・行實（2015）は、プロスポーツの試合運営ボランティアに参加した大学生を対象に、グループインタビューを実施し、大学生が様々な参加動機を持ちプログラムに参加し、よい経験やにがい経験をしながらも仲間との協働を通じて活動を乗り切り、「サポーターからの影響」を大きく受け「チ

ームへの意識の変化」、「支える意識の変化」、「観戦意識の変化」、「接客意識の変化」の4つの意識を変化させるという意識変容プロセスを示している。

以上のような研究蓄積からは、スポーツ・ボランティア参加者の体験の意味とその意識変容プロセスが詳細に把握できる。そして、従来の量的な調査で捉えきれなかった一般ボランティアとスポーツ・ボランティアの相違、つまり、スポーツ・ボランティアに固有の活動の意義が示唆されている。

しかしながら、いずれの研究も対象が大学生に限られている点が研究の限界として指摘できよう。

5. 「その他」に関する先行研究

本研究で指定した分析枠組みでは分類できないスポーツ・ボランティアの研究として、まず、堺（1997）は、スポーツイベントの「まちづくり」の効果についてボランティアを対象に検証している。

次に、これまでのスポーツ・ボランティア参加者を対象にした研究とは異なる視点で、ボランティアを受ける側に焦点を当てた研究として、大学生ボランティアに対する参加者や保護者の意識に関する研究（大西ら、2010；大山ら、2011；大山、2015）がみられる。また、李ら（2008）は、スポーツ・ボランティア団体の形成過程についての研究を行っている。

IV. 考察

1. 「スポーツからのボランティア」に関する研究の必要性

以上のスポーツ・ボランティア研究の動向から、今後の研究課題を提起したい。まず、【理論・実態】に関する研究からは、スポーツ・ボランティアの実態が明らかに

なり、その課題が議論されるとともに、活動の分類や役割が示されている。その分類に基づいて先行研究を概観したところ、「スポーツへのボランティア」の研究蓄積は豊富であるにも関わらず、「スポーツからのボランティア」の研究は皆無であることが指摘できる。

さて、「スポーツへのボランティア」は、スポーツ現場でのボランティア活動のことである。しかし、スポーツ・ボランティアは、これだけに留まらず「スポーツからのボランティア」をも含む概念である。つまり、このことが、一般ボランティアと比して、スポーツ・ボランティア固有の特徴であると考えられる。例えば、「環境ボランティア」は、海や山や我々の生活環境といった環境に関するボランティア活動であり、「介護ボランティア」は、介護を必要とする人々へのボランティア活動である。これらが、活動主体となってボランティアを発現することはない。しかし、スポーツの場合、スポーツ活動そのものが自発的な活動であるため、スポーツの活動主体が逆にボランティア活動を発現するとも考えられる。だからこそ、「スポーツからのボランティア」の意味や役割を解明することは、スポーツにおけるボランティアを敢えて「スポーツ・ボランティア」として捉えて研究する意義の一つであると言えるのではないだろうか。そして、その営みの可能性を探求することで文化としてスポーツが広く認識されていくことに寄与できると考える。

しかしながら、これまで、「スポーツからのボランティア」の活動主体は、「プロスポーツ選手」や「トップアスリート」として捉えられてきた。実際、2011年の東日本大震災の際には、多くのプロスポーツ選手やトップアスリートがチャリティー活動を展開した。だが、「スポーツからのボランティア」は、プロスポーツ選手やアスリ

ートによる活動に留まらない。例えば、Jリーグでは、各クラブのサポーターが開幕前にスタジアムを清掃したり、マリンスポーツでは、サーファーが海岸の美化活動を展開したり、総合型地域スポーツクラブでは、スポーツ以外の様々な活動を展開している。このように、スポーツ・ボランティアは、多様に変化しており、「スポーツからのボランティア」の活動主体をプロスポーツ選手やトップアスリートといったトップレベル競技者に限定するのではなく、もっと広範に捉えることが必要である。つまり、「スポーツからのボランティア」の活動主体を再考し、その実態や行動原理を明らかにすることが、スポーツ・ボランティアにおける今後の研究課題の一つとして提起できよう。

スポーツには、「する・みる・支える」の3つの関わり方がある。そして、その関わりの中で、スポーツ生活者が発現し、「スポーツへのボランティア」に留まらない「スポーツからのボランティア」が現実的に確認できるのである。この関係性において、「スポーツ生活者」と「スポーツからのボランティア」がどのように結びつくのかといったことが具体的な研究課題として探求される必要があると言えよう。いずれにせよ、現象として「スポーツからのボランティア」が確認できる現状を鑑みれば、まずはその実態を明らかにし、理解していくことが喫緊の課題であると考ええる。

他方で、これまでスポーツ・ボランティアは、「自発性」、「無償性」、「公共性」、「先駆性」といった4つの一般ボランティアの基本的理念に基づいて定義されてきた。しかし、既述した「スポーツからのボランティア」の例であるサポーター団体のスタジアム清掃活動などは、自分たちがいつも利用しているスタジアムだからこそお返しの意味も含めて、お互い様といった意識の

「互酬性」に強く関係し発現していると考えられる。このことから、「スポーツからのボランティア」について言及する際には、従来のスポーツ・ボランティアの定義を慎重に検討しなければならないと考える。

2. 「体験の意味」を問う研究の必要性

次に、【参加行動】に関する研究では、スポーツ・ボランティアの参加動機が解明されているが、一般ボランティアのそれとはほとんど相違がないことが本研究により明らかとなった。このことは、スポーツ・ボランティアの敷居の低さを示す一方で、生活者の視点に立てば「スポーツ・ボランティアでなければならない」理由が認識されていないことを示している。しかし、【継続行動】に関する質的な研究からは、スポーツ・ボランティアに特異な継続要因が示されている。また、【意識変容】に関する研究においても、スポーツ・ボランティアを体験することでしか得られないような変化やその心理プロセスが明らかになってきている。具体的には、スポーツ・ボランティアに参加することで、参加者は「するスポーツ」から「支えるスポーツ」へ視点の移行を経験しており、このことは豊かなスポーツ生活を形成する上で重要な役割を果たすと考えられる。また、スポーツ・ボランティアを通して、観戦行動へポジティブな変容を示したりする点は、「みるスポーツ」の参画機会を高めることも想定できる。そして、スポーツ・ボランティアが障害者理解や接客意識の変容を促すなどといった研究成果は、スポーツ・ボランティアが生活者にとってスポーツ生活の向上といった意味に留まらない新たな可能性を示唆するものである。だが、繰り返しになるが、これまでのスポーツ・ボランティアを巡る研究は、個別の経営体の要請に答える形で、【参加行動】や【継続行動】に関する研究

が中心に進められ、結局、「スポーツ・ボランティア」でなく、「スポーツ場面におけるボランティア」の行動原理の解明に終止してきた。そこで、本研究では、従来の「スポーツ・ボランティアの行動原理の解明」といった研究課題から、「スポーツ・ボランティアを経験する意味」という研究課題への同領域のパラダイムシフトを2つ目の研究課題として提示したい。特に、そのような研究課題を採求するためには、量的な調査では限界があり、その体験の意味を体系的に把握するような定性的な研究技法による研究蓄積が必要であると考ええる。

また、それとともに、生涯学習やサービスラーニングなどの観点を基に、スポーツ・ボランティアが生活者に与える「効果」を検討する視点も重要であろう。そして、このような生活者の論理に立った研究、即ち、スポーツ経営学の基本価値と照らして、スポーツ・ボランティアの研究課題を解明することでこそ、スポーツ・ボランティアのマネジメント課題を真に議論できるものと考ええる。

V. おわりに

本研究では、これまで「何故スポーツ文化の成立にスポーツ・ボランティアが必要不可欠なのか」といった基本的な問いが不問とされてきたことを問題の背景として、先行研究を整理し、スポーツ経営学の基本価値と照らして考察することで、以下の2つの研究課題を提示することができた。

具体的には、①「『スポーツからのボランティア』に関する研究の必要性」と、②「体験の意味を問う研究の必要性」の2点であった。そして、これらの研究課題を検討することが、スポーツ・ボランティアの真の普及・発展に寄与し、スポーツ・ボランティアが何故スポーツ現象に必要不可欠

たるかを解明する手掛かりになると考える。

しかし、本研究では、これらの課題を検討するにあたって、これまでのスポーツ・ボランティア研究を「研究課題」によって整理したが、「年代別」による動向を提示するには至らなかった。研究動向を正確に把握するには必要な試みではあるが、概略的な記述に留まっている点は、本研究の限界として指摘されよう。また、スポーツ・ボランティアの研究動向を把握することで、同領域の研究課題を提示することができたものの、関連する「一般ボランティア」に関する研究蓄積、数多ある海外の研究蓄積やオーストラリアの Volunteer Involvement Program (VIP) にみられる海外先進事例（山口，2004）を議論の範疇に含めることができていないこと、そして、具体的な研究対象や研究方法について言及できていないことは、文献研究である本研究の課題として今後の実証研究を通して考究していきたい。

注

1) 2015 年 7 月 22 日時点において「スポーツ ボランティア」をキーワード検索した結果、266 件が検出された。ただし、キーワード検索の結果、検出されたもののスポーツ・ボランティアについて論じられていないものなどは省いている。

参考文献

東正樹（2013）気軽に参加できるスポーツボランティアを仕掛ける（特集 体験活動を仕掛ける）。社会教育, 68(1):34-37.
長ヶ原誠・山口泰雄・野川春夫・菊池秀夫（1991）スポーツイベントのマネジメントに関する研究(2)：ボランティアの継続意欲の視点から。鹿屋体育大学学術研

究紀要, 6:69-75.

海老原修（2002）体育・スポーツにおけるボランティアの功罪（特集 スポーツ・ボランティア）。体育の科学, 52(4):260-265.
海老原修（2003）スポーツ・ボランティアの成立要件（特集 地域スポーツ活動の財源）。体育の科学, 53(9):676-680.
海老原修（2003）地域スポーツ活動を支える財源論：「大きな政府」「小さな政府」それとも「第3の道」—総合型地域スポーツクラブにみる NPO とボランティアを手がかりとして（特集 地域スポーツ活動の財源）。体育の科学, 53(9):644-650.
遠藤大哉（2015）スポーツ NPO の現実と課題 ～実験運用の報告と考察から～。江戸川大学紀要, 25.
堀仁史・内倉康二・長野力（2011）大在地区住民のボランティア意識に関する調査研究：総合型地域スポーツクラブへの積極的関与を促す手がかりの検討を中心に。日本文理大学紀要, 39(1):54-61.
福山正和（2002）学生時代のボランティア経験がその後のボランティア活動に及ぼす影響に関する研究：キャンプボランティアの満足度と卒業後のボランティア活動の参加動機に着目して（平成13年度大学院スポーツ科学研究科修士論文概要）。大阪体育大学紀要, 33:91-93.
磯谷美穂（2008）bj リーグのボランティアの活動継続意欲に関する研究。早稲田大学大学院スポーツ科学研究科修士論文（未公刊）。
金森雅夫・黒澤毅・高橋佳三（2012）アカデミックアワー研究報告 学生スポーツボランティアのシステム構築と活動支援。びわこ成蹊スポーツ大学研究紀要, 9:145-148.
金崎良三（2005）スポーツ・ボランティア研究(1)：大学生のスポーツ・ボランティア活動についての意識と実態。佐賀大

- 学文化教育学部研究論文集, 9(2) : 201-212.
- 金崎良三 (2007) スポーツ・ボランティア研究(2) : スポーツ・ボランティア組織の形成と運営について. 佐賀大学文化教育学部研究論文集, 12(1) : 177-189.
- 川喜田二郎 (1967) 発想法—創造性開発のために. 中央公論社.
- 北村尚浩・松本耕二・國本明德・仲野隆士 (2005) スポーツ・ボランティアの組織コミットメント. 体育学研究, 50(1) : 37-57.
- 小林ゆき (2010) 社会科学におけるモータースポーツ研究の動向と課題—公道レース・マン島 TT 研究のための視座. 東洋大学大学院紀要, 47 : 1-28.
- 窪田誠志・真栄城勉・慶田花英太・高良義樹・上間達也・重見有香・備瀬みずの・島袋桂・上間浩樹・嘉手苅佑也・知花さやか (2009) 学生スポーツ・ボランティア実践事例—RSLC の 5 年間の活動を振り返り. 琉球大学教育学部教育実践総合センター紀要, 16 : 55-65.
- 工藤保子 (2000) スポーツ・ボランティア (特集 地域スポーツの将来). 体育の科学, 50(3) : 209-212.
- 毎日新聞 (2015) スポーツ大会の市民ボランティア:行橋, 応募ゼロ 設営や片付け ハーフマラソン「300人必要」/福岡. 2015年5月21日地方版. 毎日新聞社.
- 松本耕二 (1999) スポーツ・ボランティアの類型化に関する研究 : 障害者スポーツイベントのボランティアに着目して. 山口県立大学社会福祉学部紀要, 5:11-19.
- 松本耕二・田引俊和 (2009) 障がい者スポーツをささえるボランティアからみた知的障がい者のイメージと日常生活における意識・態度. 山口県立大学学術情報, 2 : 27-38.
- 松永敬子 (2012) 「京都マラソン 2012」におけるボランティア参加者の動機に関する研究—自発的参加と非自発的参加との比較—. 龍谷大学経営学論集, 52(2/3) : 55-63.
- 松野光範・佐野薫・酒井博章 (2012) スポーツボランティア組織に参加する動機づけ要因の検証 : コンサドーレ札幌のボランティア組織のアンケート調査より. 大阪学院大学経済論集, 26(2) : 135-154.
- 松岡宏高・小笠原悦子 (2002) 非営利スポーツ組織を支えるボランティアの動機 (特集 スポーツ・ボランティア). 体育の科学, 52(4) : 277-284.
- 松尾哲矢 (2002) スポーツ・ボランティアとその専門性—【ボランティア—専門職】指導者システムの再構築 (特集 スポーツ・ボランティア). 体育の科学, 52(4) : 270-276.
- 松尾哲矢・多々納秀雄・大谷善博・山本教人 (1994) ボランティア・スポーツ指導者のドロップアウトに関する社会学的研究 : 指導への過度没頭と生活支障の関連及びその規定要因について. 体育学研究, 39(3) : 163-175.
- 松下雅雄 (2005) 事例紹介 学生のスポーツボランティア活動の支援事業—スポーツの実践的指導力を持った学生を“地域とともに”育て, 地域のスポーツ活動を活性化 (特集 大学の地域貢献の促進). 大学と学生, 18 : 32-36.
- 文部科学省 (2014) スポーツにおけるボランティア活動活性化のための調査研究 (スポーツにおけるボランティア活動を実施する個人に関する調査研究). 公益財団法人 笹川スポーツ財団.
- 森谷直樹 (2002) スポーツイベントにおけるボランティア参加者の意識に関する一考察. 文化学園大学研究紀要, 25:41-49.
- 内藤正和 (2007) 大学生におけるスポーツ・ボランティア活動へのニーズに関する研

- 究. 愛知学院大学論叢. 心身科学部紀要, 3 : 21-29.
- 内藤正和 (2009) 地域のスポーツイベントにおけるボランティア活動に関する研究—依頼型のボランティアに着目して. 心身科学部紀要, 5 : 7-15.
- 仲澤眞 (2002) スポーツ・ボランティア活用の現状と課題 (特集 スポーツ・ボランティア). 体育の科学, 52 (4) : 266-269.
- 暇素代 (2009) 地域ヘルスボランティアの健康統制感・自己効力感と健康度自己評価との関係. 奈良女子大学スポーツ科学研究, 11 : 39-47.
- 日本スポーツボランティア学会 (2008) スポーツボランティア・ハンドブック. 明和出版.
- 西原康行・佐藤勝弘 (2004) ワールドカップ新潟開催における住民の意識変容 : 開催後の意識の安定化までの時系列的研究. 新潟医療福祉学会誌, 4 (1) : 37-47.
- 野村一路 (2002) 障害者スポーツにおけるボランティア—長野パラリンピックを通して (特集 スポーツ・ボランティア). 体育の科学, 52 (4) : 299-303.
- NPO 法人日本ハンディキャップテニス連盟 (2002) ボランティア・NPO レポート—新しい価値の創造に向けて スポーツへの参加を通して地域交流や社会参加を促進. 月刊福祉, 85 (9) : 92-95.
- 小栗俊之 (2001) 国際ボランティア団体・青年海外協力隊に関する研究—スポーツ部門における現状と課題. 文京学院大学研究紀要, 3 (1) : 59-77.
- 岡田隆志 (2013) 精神障害者との直接的な交流体験の機会がもたらす大学生の意識・態度・行動の変容プロセス—精神障害者とのスポーツによる交流活動を通じて. 日本福祉教育・ボランティア学習学会研究紀要, 22 : 48-62.
- 大西史晃・松田保・金森雅夫・的地修・豊田則成・廣木武士 (2010) 学生のボランティア活動による地域貢献. びわこ成蹊スポーツ大学研究紀要, 7 : 105-115.
- 大山祐太・増田貴人・安藤房治 (2011) 知的障害者のスポーツ活動における大学生ボランティアに対する保護者の意識. 弘前大学教育学部紀要, 106 : 23-30.
- 大山祐太・増田貴人・安藤房治 (2012) 知的障害者のスポーツ活動における大学生ボランティアの継続参加プロセス : スペシャルオリンピックス日本・青森の事例から. 障害者スポーツ科学, 10 (1) : 35-44.
- 大山祐太 (2015) ボランティアコーチに対する知的障害者の評価に関する一考察 : スポーツ場面の参与観察を通して. 北海道教育大学紀要人文科学・社会科学編, 65 (2) : 57-66.
- 李恩兒・秋山由里・中村好男 (2008) 高齢者の介護予防推進ボランティア活動の自主グループ設立に関する過程分析. スポーツ科学研究, 5 : 246-252.
- 堺賢治 (1997) スポーツイベントに関する研究 : ボランティアの場合. 愛媛大学教育学部保健体育紀要, 1 : 83-88.
- 桜井政成 (2007) ボランティアマネジメント 自発的行為の組織化戦略 (NPOマネジメントシリーズ). ミネルヴァ書房.
- 笹川スポーツ財団 (2011) スポーツライフ・データ 2012—スポーツライフに関する調査報告書. 財団法人 笹川スポーツ財団.
- 世戸俊男 (2002) 阪神・淡路大震災におけるボランティア—復興支援の組織ワークキャンプを通して (特集 スポーツ・ボランティア). 体育の科学, 52 (4) : 295-298.
- 清水紀宏 (1997) スポーツ経営学における基本価値の検討. 体育・スポーツ経営学研究, 13 (1) : 1-15.
- 新出昌明・齋藤隆志・川崎登志喜 (1998) <原著>長野オリンピックにおけるボラン

- ティアのイメージ分析：スポーツ経営学的視点から．東海大学紀要体育学部，28：21-30．
- 志賀真珠美・荒井弘和（2013）スペシャルオリンピックスのボランティアコーチの活動に関連する要因．スポーツ産業学研究，23（2）：241-247．
- 塩谷和雄（2002）運動部活動における外部指導者とボランティア（特集 スポーツ・ボランティア）．体育の科学，52（4）：285-289．
- スポーツにおけるボランティアの実態等に関する調査研究者協力者会議（2000）スポーツにおけるボランティア活動の実態等に関する調査研究報告書．文部省．
- 生涯学習審議会（1992）今後の社会の動向に対応した生涯学習の振興方策について（答申）．文部省．
- 田引俊和（2008）障害者スポーツを支えるボランティアの参加動機に関する研究．医療福祉研究，4：98-107．
- 高橋伸次（2001）スポーツにおけるボランティア指導者の実態とその課題—これからのスポーツ振興の政策課題として．地域政策研究，3（3）：23-45．
- 高村秀史（2013）地域と連携した総合型地域スポーツクラブにおける学生参画型プログラムの取り組み：ちびっこアジリティ教室を例として．日本福祉大学全学教育センター紀要，2：87-97．
- 武隈晃（1997）「スポーツボランティア」概念の周辺．鹿児島大学教育学部研究紀要人文社会科学編，48：57-70．
- 谷藤千香（2005）地域におけるスポーツ団体と運営ボランティア：千葉県レディースバドミントン連盟を事例として（I．教育科学系）．千葉大学教育学部研究紀要，53：175-179．
- 谷幸子・中比呂志・山下秋二・清田美絵（2003）障害者スポーツボランティアの類型化に関する研究：活動期待の視点から．体育・スポーツ経営学研究，18（1）：1-12．
- 豊田則成・金森雅夫（2007）スポーツ・ボランティアを経験することの意味とは？びわ湖大学駅伝にボランティア参加した本学学生の「語り」から．びわこ成蹊スポーツ大学研究紀要，4：9-18．
- 上田知行（2010）地域住民による健康・スポーツ活動の普及と実践事例．北翔大学北方圏生涯スポーツ研究センター年報，1：37-40．
- 山口泰雄（1998）ボランティア活動の広がり「スポーツを支える活動」の振興（特集 オリンピックと我が国スポーツの振興）．スポーツと健康，30（6）：23-25．
- 山口泰雄（2002）諸外国におけるスポーツ・ボランティア（特集 スポーツ・ボランティア）．体育の科学，52（4）：290-294．
- 山口泰雄（2004）スポーツ・ボランティアへの招待 新しいスポーツ文化の可能性．世界思想社．
- 山下博武・行實鉄平（2015）徳島ヴォルティスにおける運営ボランティア参加学生の意識変容プロセス．体育・スポーツ経営学研究，28（1）：33-51．
- 山田力也（2006）障害者スポーツボランティア活動者の意識変容と役割構造に関する研究永原学園西九州大学・佐賀短期大学紀要，37：11-18．
- 安江徹太郎（2009）地方自治体における人材育成事業への参加-地域ボランティア育成講座の運営-．リハビリテーションスポーツ，28（2）：69-72．
- 保井俊英・永田隆子・田中美紀・藤原進一郎（2004）「障害者スポーツ指導員」資格取得者の現状について（2）：ボランティア活動者の特徴．武庫川女子大学紀要人文・社会科学編，52：75-83．
- 四ッ谷年晴（2002）障害者スポーツにおけ

るボランティア--大分国際車いすマラソン大会を事例として (特集 スポーツ・ボランティア). 体育の科学, 52(4):304-308.
行實鉄平 (2009) 大学と総合型地域スポー

ツクラブの連携に関する研究--K 大学生の組織コミットメントに着目して. 久留米大学健康・スポーツ科学センター研究紀要, 16:25-36.

(受付日2015年10月16日)

(受理日2015年10月26日)